

# 情熱で走り続ける土木人生 中村英夫氏

「語り手」 中村英夫氏 名誉会員 東京都市大学 名誉総長

『土木工学の教育に長らくたずさわってこられた教授に学生がインタビューを行う「大先輩に伺う土木の学び—温故知新」(全3回)』。第2回は、ドイツや東京工業大学、東京大学で教鞭をとられ、東京都市大学の総長を経て、現在、東京都市大学名誉総長でいらっしゃる中村英夫先生にお願いした。「大学では最劣等生でしたよ」と語る中村先生が、なぜ、国内外で活躍なさるようになったのか。そこには、土木に対する情熱と国土への愛が溢れていた。

## 運動、語学、文芸に勤しんだ 学生時代

——土木を専攻された動機を教えてください。

中村——僕は、生まれが京都なのですが、高等学校の初めの頃に湯川秀樹先生がノーベル賞を受賞されて、僕の周りでは、数学や物理ができる人は物理を専攻しようという風潮がありました。大学に入ったときは僕もそう考えていたのですが、入学してすぐ、もっと秀才はいっぱいいる、

僕なんて物理を選んだってダメだと、すぐ悟りました。土木を選んだのは、こどもの頃から何にでも興味があり、鉄道少年であり昆虫少年であり、地理や旅行も好きだったことでもありました。けれど、最大の理由は、成績が悪くても入りやすかった学科が当时は土木だったからです。僕が土木を専攻してすぐ、佐久間ダムという大きなダムができました。日本で初めてアメリカ製の大型機械を使った重力式のダムです。そのダム建設までの記録を描いた映画を見て、えら

く感激しましたね。あの映画はよくできていて、湖の底に沈んでいく村が出てくるセンチメンタルな場面があったのですが、そのときにシヨスタコーヴィチの曲がきれいに流れていたのです。20歳くらいの若者にとっては非常に魅力的な映画でした。そのとき、『これは俺がやりたい仕事だ。いい学科に入った』と思いました。技術と自然が一緒になって人びとの生活にかかわっていく。そんな土木の仕事に憧れた、いや、惚れたんですね。

——では、在学中から熱心にお勉強をされていたのですか。

中村——いやいや、それが全然ダメだったんです。もうね、間違いなく最劣等生でしたよ。僕はね、いろいろなことをしたかったんです。準硬式野球部だったんですが、野球ばかりの大



中村 英夫 氏  
NAKAMURA Hideo

1935年京都生まれ、東京大学土木工学科卒、帝都高速度交通営団で地下鉄の設計、工事監理に従事した後、東京大学生産技術研究所、シュツットガルト大学(ドイツ)、東京工業大学、東京大学工学部、運輸政策研究所、武蔵工業大学環境情報学部等で研究、教育に従事。2004年より9年間東京都市大学総長、第82代土木学会会長、任期中に土木学会80周年および阪神・淡路大震災の対応に当たる。リヨン リュミエール大学、シュツットガルト大学名誉博士。

学生生活はやりたくなくて、フランス語の学校に通ったり、本もたくさん読んだりしました。それと、音楽もクラシックが好きで可能な限りたくさん聴きました。それから、映画も行ったし、アルバイトもしていました。だから、結構忙しい学生生活でした。勉強はあまり…というか全然真面目ではなかったけれど。部活もあれば、アルバイトもやり、自分の趣味もあり、たくさんの方に夢中でした。

——大学では、どのようなことを研究していましたか。

中村——僕は鉄道研究室に入ったのですが、研究に関しては、もうこれは先生に悪いことをしたと思っています。分岐器という線路を分岐して列車の進路を変える装置がありますが、当時、新幹線が新しくできるタイミングだったので、新しい分岐器を考

えるように言われました。先生に連れられていろいろなどところに見学に行きましたが、結果は本当に恥ずかしい卒業しかできませんでした。そして、大学院へは進学せず、4年で大学を卒業しました。だから、後に東大の教授になったときは、『低学歴教授』なんて言われましたね。周りにはみんな大学院をでていましたから。

### 計画、設計、施工までこなした 若手技術者時代

——4年で大学を卒業されたとのことですが、進路選択はどのような考

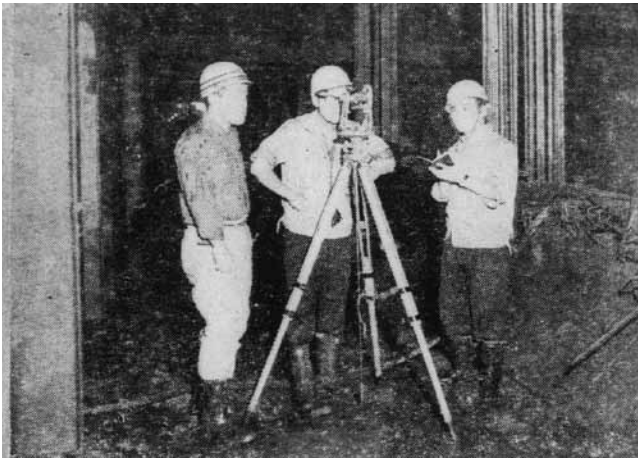


写真1 若手技術者として地下で測量作業中の写真(中央が中村氏)

えでなさったのでしょうか。

中村——僕は交通をやったかったんですが、あの頃、交通関係で大きな建設工事をやっていたのは地下鉄だけでした。それで、帝都高速度交通営団、現在の東京メトロに入社しました。まだあの頃は、今の東京メトロと違ってずっと小さな会社でした。現在の銀座線と丸ノ内線の池袋から東京までしかなかったときです。そこでは設計をし、現場で測量をし、工事の監督もやりました。

——具体的に当時の仕事の内容を教えていただけますか。

中村——設計は、日比谷線の小さな橋から駅までやりましたね。僕が設計したものも、今でもちゃんと動いていますよ。小伝馬町駅も僕の設計です。ホームを広くするために駅の柱はコンクリートで遠心力で締固めてつくって細くなるようにしました。それから、人形町駅の工事をやっているときには怪我もしました。ヘルメットは割れてしまったんだけど、そのおかげで助かりました。それだけ

危険の伴う仕事であること

を、あのとき実感しました。当時は、発注者側と受注者側が違う仕事をするのではなく、みんな一緒に汗を流してやっていました。僕も、現場で作業する人たちとともに働いていましたよ。それから、本社での設計では手回しの計算機で方程式を解いていたこともあり。20次ぐらいの連立方程式を解く計算なんです。朝から晩まで、3、4週間かかってやっていました。なんとかその手間を省けな

いかと、当時できたばかりの計算会社のコンピュータを利用してというとして調べに行ったら、1つの未知数ごとに1万円ほどかかるっていうのです。僕の月給が1万円ぐらいのときですよ。未知数が20個あると20万円。だから、上司に「冗談じゃない、君がやれ」と言われて、コンピュータではやらせてもらえませんでした。設計図も苦労しました。今はCADがあ



写真2 在独中(シュツットガルト大学で)

りますが、当時はトレーシングペーパーに少しずつ手で描かなければならず、大変でした。でも、面白かったですね。

### 研究者から教授、 人材育成の道へ

——後に大学へ戻り、研究が評価されてドイツへ招かれることになったとお伺いしましたが、どのような経緯だったのでしょうか。

中村——小伝馬町駅の柱など、会社での新しい試みを見た大学の丸安隆和先生から、1961年末に「大学に来て勉強しなさい」と言ってもらえて、東京大学の生産技術研究所に入りました。そこでは、丸安先生が写真測量の研究をなさっていて、僕は解

# 土木の学び

—温故知新

析写真測量という数学的モデルづく

りの研究をしました。また、当時、鹿

児島の内之浦で東大がロケットの発

射をしていましたが、その施設の土

木設計をする人がいないということ

で、僕がそれをやっていました。その

とき、時間のかかるこの設計の仕事

を楽にやる方法がないかと思い、そ

の頃使われ始めた電子計算機や航空

写真測量を取り入れた設計の方法を

考えはじめたのです。1964年の

東京オリンピックに合わせ日本は高

速道路や新幹線を建設していたので

ですが、それをこなす技術者の数は少

なく、一人ひとりがとても忙しかっ

たのです。それで、設計を効率化する

ために何か新しい方法を考える必要

がありました。そのあと、写真測量や

電子計算機を使った道路設計に関す

る論文を土木学会に出したら奨励賞

を受賞することができ、国際学会に

出したら今度はドイツの大学が目

留めてくれて、僕を呼んでくれたの

です。そこから、僕の人生は変わりま

したね。さながら最劣等生からのシ

ンデレラボーイってところかな。

——ドイツでの研究員、また客員教

授としての生活はどのようなもので

したか。

中村——ドイツには1回目は1967

〜1969年で合計約2年間滞在し

ましたが、生活はとても忙しいもの

でした。写真測量の研究に加えて、

当時ドイツではアウトバーンが盛ん

につくられていたので、そのアウト

バーン設計を効率化する研究をして

いました。具体的には、コンピュー

タを用いて地形を数値モデルで表現

しようというもので、今のデジタル

マッピング等の本場に初期の仕事で

した。同時に、講義もしなくてはなり

ませんでした。初めの頃は下手な英

語で講義をし、最後の方は何とかド

イツ語で話しました。今思えばやつ

てよかったと思うけれど、当時は辛

かったですね。卒業研究の指導や論

文の審査など、いろいろなこともや

らせてもらいました。

ドイツでは国土もインフラも実

によく整備され、美しいことに感心し、

日本の状態を思いやることしばし

ばでした。

——その経験を活かして東京工業大

学の助教になられたんですね。

中村——大学紛争が終わった頃に帰

国し、東京工業大学の鈴木忠義先生

から「新しい学科ができ

るから来てほしい」と言

われて1970年に助教

授として行きました。し

かし、その社会工学科は

いままで籍をおいていた

土木工学科みたいなもの

ではなく、社会学や経済

学、地域計画といったも

のを含む学際的な新しい

ものでした。僕にとつて

は初めての内容だったの

で、そこで教育・研究を

するためにたくさん勉強

しなくてはなりませんで

した。その学科の学生の興味は、当然

測量学などではなく社会、経済の間

題の方に向いていました。あのとき

辛かったのは、専門を変えなくては

ならなかったことで、測量や設計が

専門だったのに、学科に合わせてま

たく違う分野を教えなければならな

いことでした。そうして東工大で5

年くらいたった頃、東大で測量学講

座ができるというので、そちらに移

たのです。東大では、1975年から

1996年に定年退官するまで長い

間、教えたり研究したりして楽しい

日々を過ごさせてもらいました。ま

た、その頃から国土計画等各種の審

議会メンバーを務めたり、いくつか

の途上国の開発援助にも関わる機会

を得たりしました。その後は旧武蔵

工業大学に移りました。今の東京都

市大学です。兼任で運輸政策研究所

の所長もやっていました。そこでは

実際の政策づくりに役立つ研究をす

ることを目的として、あまり前例に

こだわらないやり方をと、外国人も

大勢入れて多様な意見を取り入れる

ことを心がけ、研究員の任期も3年



写真3 国際シンポジウムでのお写真

まで、と限定しました。研究というのは、長く一つのところでやっている  
とマンネリになりがちなので、期間  
を区切って集中的にやってもらって、  
そのあとは別のところで仕事した方  
が良いと。そういう想いで新しいこ  
とをどんどん取り入れましたね。

## 学ぶこと、仕事に 誇りを持つ

——武蔵工業大学でも新しい試みを  
次々と行なっていらっしゃいました

ね。

**中村**——運輸政策研究所の所長を終  
えて、2004年に武蔵工業大学の  
学長に就きました。そこでは大学の  
改革をいくつか行い、武蔵工業大学  
と東横学園女子短期大学を統合しま  
した。その際、東京都市大学へと名  
前を変えたのは、文系学部が増えた  
ことに加え、さまざまな学生にこの  
大学へ入ってもらいたかったからで  
す。やはり「工業大学」と付くとそれ  
だけでそっぽ向いてしまう女子学生



写真4 中村氏インタビューの様子

も少なくありません  
しね。それから、国  
際的な大学にするこ  
とも目指していまし  
たので、「武蔵」よ  
り「東京」の方が外  
国でもわかりやすい  
と考えたのです。も  
ちろん、簡単に名前  
を変えてはいけな  
いという思いもありま  
すよ。かつてこの大  
学が原子炉を所有し  
ていて、それを6年  
前に廃炉にしました  
が、その後これをも

とに「原子力安全工学科」を設けて、  
教育・研究をすることにしたのです。  
「原子力」という名前をつけることに  
反対する人は多かった。けれども、内  
容を知らずに入ってきた学生が、「原  
子力だったのか」と入学後初めて知  
るのは良くない、と考えました。土木  
もこれと同じだと思っんです。土木  
が専攻ではないような名前にしてい  
る学科に入って、「土木だったのか」  
とがっかりされるのはダメだと思  
います。土木という名前を残して、「土  
木に入りたい」と思う学生を呼ぶよ  
うにしていかなくはいけませんね。  
世間には土木を学びたいという若者  
はたくさんいますよ。土木工学科の  
名を早く復活させたいですね。土木  
はやりがいのある仕事です。大きいだ  
けではない、世の中のためになって、  
いつまでも自分の仕事が残る。

——最後に学生へのメッセージをお  
願います

**中村**——「でっかく事を考えろ」と  
言いたいです。運動も、勉強も、そし  
ていろんなことをやり、同時に土木  
にいることに誇りと夢を持って、と思  
います。物が完成した喜びをこんな  
にも大きく感じられ、人びとが健や

かに生きているのを見て、やりがい  
を感じられるような仕事は土木だけ  
です。魅力のある建設が少なく  
なったというけれど、それは新しい  
プロジェクトをみんなで作らないか  
らですよ。海外はもちろんこの国で  
もやらなければいけない仕事はまだ  
いっぱいありますよ。維持管理も  
もちろん重要だけれど、維持管理だけ  
ではない。今の日本は昔に比べたら  
断然お金持ちです。この先進国で国  
土を安全で美しいものにするための  
事業をするお金がないって言ったら  
世界に笑われますよ。必要な新しい  
事業を考えてつくっていくかないとい  
けません。新しいプロジェクトを考  
えると反対する人はいるでしょうが、  
将来のため必要なものは何として  
つくる必要がありますよ。若い人に  
もっと夢をもってほしいですね。国  
土が美しくなるように、人びとの生  
活がよくなるように、そういうこと  
を考えて土木を志す学生諸君には行  
動してほしいと思います。

〔取材・執筆〕

朝倉 萌子

学生編集委員

飯島 怜

学生編集委員